

日本における修復技術の変遷

昭和女子大学教授

増田 勝彦 ますだ・かつひこ

はじめに

日本の絵画・文書などの基底材・支持体は、絹や紙を主体とした脆弱な物質で構成されています。その理由から、損傷も受けやすく、その度に修復が必要となります。即ち修復を繰り返すことで、絵画・文書の伝承が可能となっているのです。別な言い方で言えば、修復を繰り返さざるを得ない物質的理由があり、修復の繰り返しは、修復技術の発達を促したとも言えるのではないのでしょうか。また、結果として修復を繰り返すことが出来る修復技術が生まれたと言えるでしょう。

年数を経て傷んだ掛軸、卷子、屏風などの補修、修復などでは、装幀形式は旧形式を維持するものの、本紙周囲の表装裂を替える場合が多いのですが、表具師が歴史的にその仕事を担ってきました。一方、日本の図書文書の分野では、尊重の態度表明の一つとして、手紙を卷子や各軸へ、装幀替えること、例えば、手紙を掛軸や卷子に、或いは屏風に貼り付けるなどが度々行われていました。

柔軟性を維持するための弱い接着と、それに伴い比較的容易に修理の繰り返しを許容する技術体系は、世界基準の修復原則に適う箇所も多く、海外各地域の文化財保存のために、日本の修理用素材と技術が応用されています。

1. 表装は絵画や文書に欠かせない要素である

8世紀の正倉院の文書に、仏教經典の写本用に紙を染色し、表紙、本文、軸を組み合わせて表具していく装こう手（表具師は現在の名称）の仕事に関する記述がある。

以来、表具師は仏教寺院で必要とされてきた。事実、今も神社仏閣は個人表具師の主要な顧客の一人である。

他方、一般人の間で、日常生活を豊かにするために居間に絵を飾るようになったことから、表具師は貴族階級や商人へと取引先を拡大していった。

仏僧らは宗教儀式にあたり、荘厳な表装を高く評価し、表具師には書画の縁へりに式服の裂を使うよう求めた。

表装に豪華な裂を使うには適切な紙を選ぶことが重要である。その選択については、日本ではいつの時代にも多くの紙製造者が豊富な種類の紙を供給して対応してきた。

●日本画の表装は裏打ちと各部分の貼り合せにより行われる。

日本画は描かれたそのままに展示されることは稀で、展示や保存には特定の装幀形式に従って表装する必要がある。書画の支持体が絹や紙であり、西洋の麻のキャンバスほど丈夫ではないからだ。時代を問わず、装幀替え、解体、裏打ち直し、劣化した古い掛軸や卷子の修復が行われてきた。

修復の繰り返しや巻物や書物用の柔軟な構造の中から、弱い接着を行う可逆性（リバーシブル）のある修復方法が生まれた。

●装訂形態を変える例は豊富にある。

紙の扇子に描かれた15世紀の水墨画の掛軸がある。ある仏教僧が扇子に絵が描かれた掛軸の作成を依頼したものである。絵を囲む台紙には、それが師匠である高僧が愛用していた扇子から

掛軸に変えたものである旨が記されている。

屏風として制作された16世紀の有名な絵（絵師：長谷川等伯）が今では掛軸として飾られている例も知られている。日本には、書簡、書物、巻物、扇子を掛け軸に装幀替える長い歴史がある。このことから、掛軸の鑑賞は日本人の心に古い伝統として存在していることが分かる。江戸時代には、巻物や書物の書跡を集めてそれを手鑑に貼ることが流行した。このように、補修と修復の基本技術は装幀替えの伝統により形成されてきた。

●建築様式により掛け軸の場所も確保された。

日本建築の歴史において、15世紀の床の間の登場は掛軸形式に表装する書画にとって大きな利点となった。床の間は客人だけでなく家の主にとっても部屋の中心として設計される。中央を掛軸で飾り、その脇に何か工芸品を配する。掛軸は最適な配置場所を手に入れ、部屋にしかるべき威厳を添える重要な装飾品として不可欠のものとなった。

床の間に飾るそのような品々は事ある毎に替えることになっている（客を迎える、季節毎、伝統行事の際など）。かくして、掛軸の収集と装訂形式の変更は上流階級の間で人気を得た。

●表具師は表装と修復を共に行う。

日本の歴史画や歴史文書は表装としっかり一体化していることは非常によく知られている。これにより、日本では、保存処置が表装工房で行われ、修復工程が表装工程に組み込まれるという伝統が生まれた。

修復と表装工程が工房での作業上分かちがたいことは、日本の文書保存状況を理解する上で鍵となる。

19世紀後半の明治維新以来、多くの芸術品が市場に出て、新しいタイプの収集家が積極的に自分のコレクションを装幀替えした。詩歌の本は解体され、巻物は裁断され、多くの構成部分が掛軸に変身した。やがて、こうした時代の装

幀替えにより修復、裏打ち技術が一層向上発展することとなった。

2. 柔らかさと多孔性

この二つの言葉は日本の文書保存で発達してきた技術を理解するうえで鍵となる。

手漉和紙同士を貼り付ける時には、糊の層を作る必要がない。両方に何百万という繊維間の隙間があり、その繊維上でくっつきあうからだ。和紙は非常に多孔性の繊維網構造を持つため、接着剤が当該箇所にも留まる。楮の繊維には優れた接着効果を示す特異な特徴がある。

そこで、掛軸の紙による裏打ちである。多孔質の繊維網構造において優れた接着性を得るために、日本の表具師は非常に薄い濃度（粘度）の糊を使って刷毛を使う技術を開発した。日本の表具師は接着する紙の多孔質構造を保ち、厚い板紙のような固さにしない。

3. 修復工房の近代化

最近の修復技術の発展は、例えば、古い裏打ちの除去法、不安定な色料の固定、良質の紙や糊の製造など各工程や素材の向上による。そして、欧米で改良された保存戦略の導入は保存修復技術にも大きな影響を与えている。

その一つの契機は、昭和42（1967）年に行われた、イギリスの考古学・保存科学者H.J. プレンダーリース（1898-1997）による著作『古代遺物及び美術品の保存』〔Harold James Plenderleith "The Conservation of Antiquities and Works of Art -Treatment, Repair, and Restoration- (1956)〕の翻訳刊行事業だった。この翻訳は、国宝修理装幀師連盟という修復工房の団体が行った事業だった。洗練を加えた歴史的技術に欧米で進展しつつある自然科学的なノウハウを取り入れた保存技術に関心が向けられたのだった。

●修復を担当する組織

平成7年、国は「装こう修理技術」が文化財保存にとって必要不可欠であると認識し、その

技術を保持している団体として「国宝修理装・師連盟」を選定した。このことにより国宝修理装飾師連盟は、文化財修理技術の更なる研鑽向上と後継者育成策を講ずる社会的責務を負うこととなった。国はそれらに事業に対して補助金を支給できるようになった。平成17年には法人化を行い、平成23年時点、加盟工房は東京2、京都5、大阪1、滋賀1、奈良1、静岡1の11社であり、所属する登録技術者は140人に及んでいる。

連盟構成員の技術向上を目指して、平成15年度より連盟独自の修理技術者資格制度を運用している他、構成員が行う研究への支援を行う。

また、工房単位ではなく連盟として修復事業を請け負い、各工房から派遣された専門家による修復を行うことも行っている。このことにより単なる工房の集まりから構成員による活動を行う連盟へと進歩している。

●連盟と博物館内保存組織

博物館収蔵の芸術作品の保存は、第二次世界大戦後、特に、1950年の「文化財保護法」の成立以降盛んになった。しかし、法律が制定されたとはいえ、一部の国立博物館以外の博物館では、専門のコンサバター（保存修復担当者）のいる専門修復部門を設けてはいない。国の文化財として指定された歴史的絵画や文書はほとんど民間の工房が博物館内の空間で修復作業を行うことも多い。そのため、通常、博物館内の保存アトリエでは博物館職員が働いているような国から来た訪問者には、誤解を生むかも知れない。

現在、京都、奈良、九州の国立博物館には保存センターが併設されているが、災害から守る安全な空間を提供するために建物を工房に貸しているようなものである。東京と九州国立博物館だけがコンサバターと科学者を抱える保存部門を設けている。しかし、同館が専門部門を設けるまでは、修復部門があるのは国立公文書館と国立国会図書館だけだった。

九州国立博物館には、修復作業をする施設が整えられており、博物館科学セクションには自然科学者が勤務しているが、実際の修復作業は、上記の連盟構成工房から派遣された専門家により実施されている。

すこし事情が異なるのは、東京国立博物館である。当博物館には保存修復課が有り、外部の工房に注文する修復の傍ら、課員による修復も行われている。

4. 修復資材・設備などの改良

戦後の欧米の文化財保存関係者の訪日に刺激され、従来の美術品修復から文化財の修復へと視点を変化させる一つの起点として、昭和40年代に行われた、重要文化財色定法師一筆一切経の修復がある。そこでは、工房が直接、修復資材としての手漉き和紙抄造工程に注文を付けた。殆どの和紙抄造で使われているソーダ灰でなく、旧法即ち灰汁煮などを要求した。昭和51年には、文化財保存のための技術として、福西氏の宇陀紙、同52年には上窪氏の美栖紙の製作技術が国により選定を受けた。美濃和紙は、それとは異なり、重要無形文化財として、工芸の一環の中で指定されている。

しかし、文化財修復についての認識が高まると共に、工房では、修復対象に適合した品質の和紙を多種類、少量ずつ必要とするようになった。その方向の具体化は、平成6年には、表具用手漉和紙（補修紙）製作として高知県の井上稔男氏の認定に現れている。井上氏は、目的に応じた多種類の和紙抄造に対応するとしている。

それらの和紙を使いこなす技術は、小麦澱粉の糊、それを長年瓶の中で貯蔵することで変性した古糊、数種類の刷毛、裏打の際に使用する打刷毛、乾燥と伸展の道具としての仮張りなどほとんどは伝統的な技術システムで行われるが、本紙の補修に関しては、現代的な道具が用いられるようになっていく。製図用トレース台を大型化した様な、大型の透光板を詰め込んだ作業台、数種の不織布、合成樹脂フィルム、などは積極的に使われるよう

になった。

さらに、補修作業自体の精密化が進み、欠損部分の正確な補填が、透光作業台を利用して行われる。その結果、1点の本紙を補修する期間も長く必要となっている。

次の段階では、補修紙の吟味が厳しくなり、修復対象の本紙に近似した補修紙を求めて、自工房内に紙漉き設備を設ける様になっている。

古い時代の本紙に似た表情の紙を求めるためには、本紙自身を調査することによって、その原料処理と抄造、乾燥と加工にいたる技術を想定し、その想定技術に従って仕上げた紙の表情を本紙と比較することを繰り返すことが行われる。本紙の調査に関しては、高知県紙産業技術センター嘱託の大川昭典氏の功績が非常に大きいと思っている。大川氏によって、本紙繊維の調査結果と、抄造技術とが有機的に結ばれ、近似した補修紙製作へ実現化することとなった。

修復技術の精妙化は、紙のつぎ方、紙の種類を選別、補修方法の精密化、補修材料の調整だけでなく、修復用資材の現代化によっても達せられている。照明器具、刃物類、作業台、サクシオンテーブル、除塵室から、脱イオン水、不織布、化繊紙、フィルム類に至るまで次々と出てくる製品を取り込んで技術を支える物となっている。それらの資材は、美術作品単品を修復するためだけでなく、大量の資料を処置する必要が出てきた際には、不可欠な品々で、補修作業の機械化としての漉嵌め法および器具の開発さえも工房が主体となって行われている。

この数十年の環境としては、修復に関連した出版物の増加がある。国宝修理装演師連盟による研修会報告書や工房で発行される報告書は、かなり詳しく説明がされていて、文化財を扱う学芸員に対する教科書的な役割も果たしているものと思われる。

一般の出版社から出されている関係書籍にも、修復の項目があって説明がなされているが、それ

は初心者や経験の少ない非専門家が文書などをファーストエイド的に処置する際に、修復・補修処置が文化財保存の原則から逸脱しないように、用心して編集されているものである。

おわりに

いままで述べてきたように、国や都道府県の指定品に関しては、本紙の研究、修復方法と資材についての研究、工房環境に加えて修復記録など、修復技術者の質的向上を目指した国宝修理装演師連盟による事業運営がなされているが、連盟参加工房を主とする私営工房に任されている技術者の実技教育の同準化には、資格制度も効果を上げている。

包括的な保存処置の中でも修復は資料に直接変化を与える手作業を多く含むものであるから、熟練技術の世代移転はどうしても避けて通ることが出来ない。その観点からも、連盟として構成工房を横断して適用されている資格制度は効果ある重要なシステムとなっている。

一方、海外に所蔵されている日本の書画を中心とする資料を直接取り扱う立場の技術者への技術移転に対しては、海外からの要望に応える形で、1980年代には東京国立文化財研究所(当時の名称)による国際研修会(対象は紙資料と漆芸品の隔年開催)、在外日本古美術品修復協力事業が開始され、現在まで継続している。国際研修では、海外から毎年10名ほどの技術者を招聘し約3週間ほどの実技研修を行っている。紙資料の研修技術内容は、日本の書画に対して適用されるだけでなく、海外諸国の資料保存に応用され成果を上げている。

国際研修とほぼ同時期に開始された「在外日本古美術品修復協力事業」では、海外に拠点を置いて現地で修復作業を行い、地域の技術者への技術移転を広く行う試みも定例化しつつある。その際の日本技術者派遣については、国宝修理装演師連盟との協力により実現している。さらにこの事業に於いて強調すべき点は、学芸員が日本の技術を理解する場を提供していることである。日本美術を扱う学芸員に日本文化の一部としての資料修復

技術を理解してもらう機会となっているのである。

以上、日本の修復技術が、独自の工夫によりさらに精密な技術へと展開する傍ら、海外で発展した技術の日本への応用も行っており、これからも

国際的な技術交流が盛んになる状況は維持されよう。その中で、内外の修復現場で重要な修復資材として使用されている和紙など伝統的製品が先細りである現状を懸念するものである。

原 題：Changes in Conservation Techniques in Japan

報告者：Katsuhiko MASUDA, Professor, Showa Women's University